

「平成29年度 気になる子どもの保育研修会」報告書

<期 日> 平成29年度10月27日（金）

<会 場> マリトピア

<主 催> 佐賀県保育会

<参加人数> 114名

<内 容>

研修1 10:00～10:20

「基調講演」 指山 健次郎 氏（佐賀県保育会 会長）

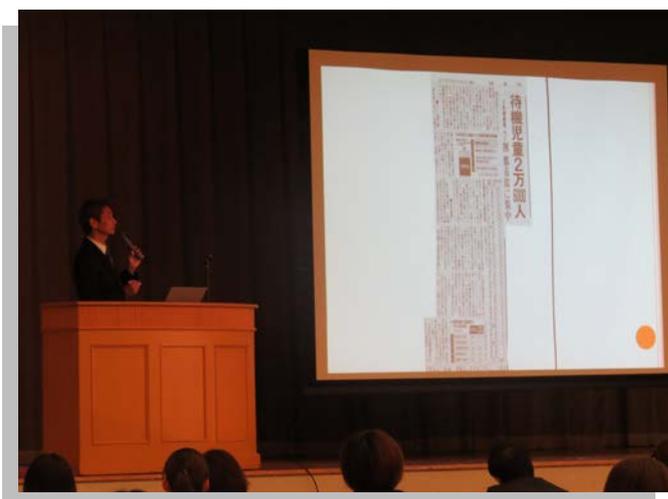
研修2 10:30～12:00 13:00～16:00

「発達が気になる子の理解と支援」

藤原 里美 氏（チャイルドフード・ラボ 所長・明星大学非常勤講師・元東京都立小児総合医療センター・こども家族早期発達支援学会副会長・臨床発達心理士・早期発達支援コーディネーターSV・自閉症スペクトラム支援士・保育士）

研修1 「基調講演」講師：指山 健次郎 氏 （佐賀県保育会会長）

- 1、子ども子育て支援新制度
- 2、待機児童
- 3、保育士不足
- 4、読み聞かせ「ラブ・ユー・フォーエバー」



- ・子どもを思う気持ち、大切に思う気持ち、一つの命の尊さを改めて感じる
- ・女性の就業率が増加しているため、入所児童も1～2歳児入所が増えている。未満児の受け入れが増えなければ待機児童は減少しないのではないかと。

研修2 「発達が気になる子の理解と支援」

講師：藤原 里美 氏 （チャイルドフード・ラボ 所長・明星大学非常勤講師・元東京都立小児総合医療センター・こども家族早期発達支援学会副会長・臨床発達心理士・早期発達支援コーディネーターS V・自閉症スペクトラム支援士・保育士）



◎多様な子どもたちの発達支援 ～ 支援のポイントとクラスづくり ～

- ・ 保育の中（集団）では困った子→本人も困っている子である。
- ・ 短所と長所は裏腹である、すばらしい研究者になる。
- ・ ○○すぎると生活に支障が。Too=あまりにも○○すぎる
- ・ 医師は Too マッチを集め診断をしている。診断名は大切ではなく、その子の Too を理解してしからずに支援をする（努力不足でもしつけでもないスペシャルなニーズがあることを周囲が理解してあげる）
- ・ 冰山モデルで考える・・・海の上に浮かぶ（行動・言葉・状態）→見えている部分
海の中に沈んでいる（理由など）→見えない部分、脳の働き方
発達の特徴を見て考え仮説を立てることが大事である。仮説に基づく支援をする。

<子どもの脳の特性を理解するために>

認知→環境から感覚で記憶を自分の脳に取り入れる

脳で整理、整頓し理解し行動する

感覚・記憶・思考⇒認知を使いながら生活をしている

（感覚）活発すぎる・不注意すぎる・・・ADHD

氷山の下、脳の特性が似ていて困っている根っこは同じである

覚醒レベル：脳も目覚めさせ方の調整が苦手である。

固有覚・前庭覚：体の内側に感じる感覚の偏りがある。

（固有覚→関節の曲げ伸ばし、筋肉の動きを脳に伝える感覚）

（前庭覚→身体をまっすぐに保ってくれる感覚）バランス感覚は三半規管と目の動きが必要となる。眼球の動きもポイントとなり一歳半から発達し年長までには完成しておかなければ小学校では板書ができない。

- ・ 人により前庭覚と固有覚がちがいが普通の生活では感覚が足りずに揺れたり、回ったり、飛んで感覚を入れている。

- ・感覚調整が難しいと
 - 鈍感タイプ→多動・・・刺激が入りにくくより強い刺激が沢山必要である（感覚探求型）
 - 敏感タイプ→不注意・・・少しの刺激をととても強く感じる（感覚防衛反応）
- 感覚調整行動・・・私たちも自然に行なっている、自然に出来ない場合は大人がマネジメントする。
 - 覚醒レベルの調整を図り鈍感タイプは感覚を満たすことも大事である。
 - 環境を低刺激にする。
 - クールダウンできる場所や者を用意する。
 - 言葉かけは最低限に抑える→大人の言葉かけも刺激になる。近づいて、穏やかに、静かなトーンで伝えるようにする。
- （記憶）こだわりすぎる・不安が強すぎる・・・ASD
 - 前頭前野が上手く機能しないと⇒衝動的・自己中心的 覚えられない・思い出せない
 - 見通しがもてない・行動の結果が予測できない
 - 失敗や変更に弱い
- ・環境構成のポイント・・・場所を分かりやすくする・スケジュールを分かりやすくする・見て分かるようにする・思い出せるようにする。
- ・疑似体験で（遊び）で発達を促していくようにする。

困った行動は、子どもからのコミュニケーションである。

- ・好ましい行動では沢山褒める。
- ・好ましくない行動は見て見ぬふりをする。
- ・好ましくない行動を減らすためには指示を適切に出しその時に子どもがやるべき行動を伝える。
- ・笑顔で優しく伝える。

全ての子どもが共生できる体制づくり

- ・みんなちがってみんないい・・・体現する保育
- ・それぞれの発達特性・段階を尊重する。
- ・一人遊びを大切に考える。
- ・保育形態を多様に、柔軟に考える

ものさしの違いを尊重しながら

- ・子どもは「私の大切な見方、感じ方、考え方を、認めてくれた・受け入れてくれた」と思い安心を感じるのである。発達障害を含めた、発達に偏りのある子ども達に必要なことは、この安心感だといえる。少しずれた「ものさし」をもって生きていくことは、実はとても大変なことです。そのずれを身近な人が理解し、受け止めてくれる、それが身近な先生であれば心強いことはない。

（報告）

集団の中で困った子は実は本人が一番困っているということがよく分かった。日々の保育で悩みながら対応をしている中、実際の場面での対応、支援の仕方など多くのことを学ぶことが出来た。一人ひとり「ものさし」があることを理解し、ちょっと視点を変えながら、その子に合う支援をしていきたいと思う。安心感の中で子ども達がのびのびと成長していけるように務めていきたいと改めて感じた。

（文責：志久慈音保育園 松本 恵子）